



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造 : 観光創造を考えるための原石として
Author(s)	大平, 具彦
Description	退職記念講演. 平成21年2月27日. 札幌市.
Relation	文化を読み直す――退職記念講演録 / 大平具彦著 = Rereading the Culture : Valedictory Lectures / Tomohiko OHIRA
Citation	CATS叢書, 2, 1-29
Issue Date	2009-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38688
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATSLibrary02-1.pdf



退職記念講演

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造 ～観光創造を考えるための原石として～

2009 年 2 月 27 日（金） 15:20～16:20

北海道大学情報教育館 3 階スタジオ型多目的中講義室にて

（主催：北海道大学観光学高等研究センター）

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造

～観光創造を考えるための原石として～

大平具彦

今日の観光創造フォーラムには色々なプログラムがありまして、その中で私の担当するのは「旅とは何だろうか」という原論的な内容ということで、そうした観点からラフカディオ・ハーンを選んでみました。皆さんのお手元に資料（本書の pp. 17-29）があると思いますので、これに従って話を進めてゆこうと思います。

まず、なぜラフカディオ・ハーンなのか、という問題設定のところから話します。日本に帰化して小泉八雲となり、『怪談』をはじめ、日本の文化地層の深き理解者として知られるラフカディオ・ハーン。しかし日本に到着するまで、そして到着後も彼は、実は旅人の中の旅人でした。現に旅先の日本で、小泉節子という女性と結婚して名前まで変えてしまう、国籍も変えてしまう、そして定住してしまうという、まさに只者ではない旅人であります。後に見ますように、このラフカディオ・ハーンの内部では、旅先で吸収した世界中の文化地層が渾然となって渦巻いております。後ほどこれと関連させて述べますが、最近の 1980 年代 90 年代から、クレオールという思想がフランスを中心に文化論・思想論の立場から論じられるようになりました。どういうものかと言いますと、それまで近代文明というのは西洋を中心に進んできて、その一元的な原理が世界に波及していったのですが、そういう原理に代わって、世界には様々な文化があるわけだから、それらが異種混雑して新しい文化が創られてゆくという立場を、クレ奥ールの思想と呼んでいます。これから述べてゆきますが、ラフカディオ・ハーンは実はその先駆的な体現者でした。そうであれば、ラフカディオ・ハーンはイギリス、アイルランドといういわゆるアングロサクソンの出身なのですが、それまで世界を牛耳ってきた西洋的世界基準とは別の基準を提出したということが言えるわけでして、その点で高く評価される人です。そして彼は、日本においてもそうであったように、旅先で必ず新たな世界を創造し、また、それまでとは異なる自己を新たに創造してゆきます。そういう彼独特の体験をラフカディオ・ハーンの体験と呼ぶとすれば、それはいかなる体験なのか。そうであるのなら、このラフカディオ・ハーンの体験には、おそらく観光創造を考えるための

原石が豊かに眠っているのではないか、ということで、話をさせていただこうというわけです。お断りしておきますけれども、私はラフカディオ・ハーンの専門家ではありません。かつて大学院の授業で、文化の多様性というテーマでこのラフカディオ・ハーンを取り上げたことがありますして、色々と読んでみるとなかなか奥が深く、私自身も大いに興味を抱くようになり、そうした経緯があって、本日、ラフカディオ・ハーンを選んでみたような次第です。

さて、では、ラフカディオ・ハーンの旅の足取りを先ず見ておきたいと思います。資料 1 (pp. 23-24) をご覧下さい。日本に到着するまでラフカディオ・ハーンはどういう旅をしてきたのか、その足取りを年代順にまとめておきました。生まれたのは 1850 年です。ギリシャのイオニア諸島レフカス島（レフカダ島）に生まれる。意外ですね。父はアイルランド出身で、イギリス軍の軍医。母はマルタ島生まれで、アラブの血も混じっていたと伝えられるギリシャ人です。すでに出生の時から文化的混血を体現しているということです。調べていて面白いなと思ったのですが、右側の欄をご覧下さい。Lafcadio Hearn という綴りなのですが、非常にシンボリックな事実がありまして、名は体を表すということなのではないでしょうか、「ラフカディオ」という名は生地レフカダから取られていて、レフカダには「さまよう」という意味があるそうです。また「ハーン」という名前ですが、これは中世英語の *erren* から来ていて、ラテン語の *errare* すなわち「漂泊する」という語に由来しているとのこと。Lafcadio Hearn という名前がまさしく、彼の一生をあらかじめ予言しているような、そういう名前だったわけです。1 歳の時に、父が西インド諸島（カリブ海）へと転属になったため、母と女中（お母さんがギリシャ人で英語が話せないので通訳も兼任）に付き添われて、父の生家のあるダブリン（アイルランド）に到着します。後に両親は離婚となり、お母さんは故郷のギリシャに帰ってしまう。そして大叔母に引き取られます。アンダーラインをつけておきましたが（アンダーライン部分はポイントとなることです）、ラフカディオは小さい頃から民話とか神話とか怪奇話などに異常な関心を示していたそうです。これは後の彼に結びつきます。13 歳で英国本土の学校に入る。17 歳で大叔母さんの遠縁の世話で北フランスに留学。この留学先でフランス文学に親しんでいます。このあたりからラフカディオ・ハーンらしい生涯が始まるのですが、その後 19 歳でアメリカに渡ります。ニューヨークを経てオハイオ州シンシナティに移住。これはよくエピソードとして引き合いに出されるのですが、混血黒人マッティ・フォリー（炊事に雇われていた女性）との結婚がもとで勤め先の新聞社を解雇されてしまう。当時、黒人との結婚は禁じられておりました。各種の仕事を見つけては窮乏生活を続ける中、図書館で読書にふけります。再び記者となってから、下層社会、特に黒人の風俗を好んで書いています。27 歳の時に、新たな変化を求めてルイジアナ州ニューオーリンズに移住、この地はラフカディオ・ハーンにとってなかなか重要なところでありまして、各国、各地域の文化が混血しあうこの街で 10 年間を過ごします。右側の欄 (pp. 23-24) を見て下さい。この時期の

様々な彼の活動を書いておきました。混血文化、クレオール文化に深い関心を抱き、関連記事をたくさん書いています。フランス文学、ロシア文学を紹介し、それから『異文学遺文集』（民族伝承再話集）という本を出していますね。扱われている範囲の広さが凄いのです。エジプト、エスキモー、インド、フィンランド、アラビア、ユダヤ、どの文化圏にでも関心を持ってしまふ。ですから日本で『怪談』を書いたというのも、その延長上にあるということです。さて、ニューオーリンズで万国博覧会が開催された時に日本に関心を持つようになり『古事記』を読む。当時チェンバレンという日本学者が東大の先生にいたのですが、この『古事記』はそのチェンバレンが英訳したものです。それから『クレオール俚諺集』、『クレオール料理法』も書いています。料理本まで書いてしまうのですから、クレオールにはよほど惚れ込んだのでしょう。それから『中国怪談集』も出しています。世界のあらゆる地域が、ハーンの中に溶け込んでゆくわけです。次のページにゆきますと、1887 年 37 歳の時に、西洋以外の未知の世界を求めてニューオーリンズを離れてカリブ海西インド諸島の一つ、フランス領マルチニック島に渡り、そこで 2 年間を過ごします。このマルチニックというのは、後の今日の話のポイントの一つになります。右側の欄（p. 24）を見ますと、マルチニックの熱帯美、クレオール混血文化に魅せられた紀行文、見聞記のほか、ニューオーリンズやマルチニックに想を得た小説『チータ』、『ユーマ』を執筆していますね。この二つの作品は邦訳されています。さらにマルチニックの民話を収集しています。そしてアメリカに戻り、『西インド諸島での二年間』という本を書いたり、『チータ』や『ユーマ』を刊行したりします。何と日本に来る前に彼はこのように旅から旅を重ね、世界中のあらゆるものを吸収して、そして日本にやってくるわけです。ニューヨークの『ハーパーズ・マンスリー』誌の学芸記者として日本に派遣されて、横浜に到着するのが 1890 年です。日本においても、横浜、松江、熊本、神戸、東京、その他日本各地を旅行します。私はラフカディオ・ハーンに北海道にも来て欲しかったと思っておりまして、そうすれば、北海道の風土、アイヌの民話などに深く分け入って、きっとすばらしい本を書いてくれたでしょうから。

講演メモ（pp. 19-22）の方に戻りましょう。では、こうしたラフカディオ・ハーンの体験というのは何なのか、という方に話を進めます。「ハーンは新たな土地に行くと、必ずその土地から養分を深部から吸い込んで、その土地の人間も気づかないでいた新たな世界を創造し、そのことを通して自己もまた新しく創造していく」ということでありまして、ラフカディオ・ハーンの全体を見ますと、何よりも彼の旅の足取りが語っているように、彼の生そのものがその体现であったということが言えます。それをよく示す具体例として、関連テキストを資料 2（pp. 25-29）として色々と揃えてみました。

実際に彼はどのように旅をしているかということで、テキスト 1、2（p. 25）を見ていただきたいのですが、最初のものは「東洋の第一日目」と題された文です。ハーンは、1890 年の 4 月 4 日に横浜に到着しております。このテキストが発表されたのは 1891 年の 11 月ですから、若干時間は経っているのですが、読んでみて、私は、旅先の第一日

目にこんなことを旅行者が感じ取ることができるのだろうかと思嘆しました。ポイント部分にアンダーラインを引いておきましたが、先ず出だしからゆきますと、「これまで全く未知だった世界を、この目は確かに見ている。そんな当たり前の事実を十分承知しながらも、私はどこかうっとりとしていた。その日のあまりの神々しい美しさに、私の意識も尋常ではなかった」——。アンダーラインのところだけを読んでゆきますと、「それはむしろはっきりした色調というより、やさしい透明感による魅力ではないだろうか。[……] まるでなにもかも、小さな妖精の国のようだ。人も物もみんな小さく、風変わりで神秘的である」。さらにずっと下にゆきますと、到着した地である横浜の店の店員さんは法被など着ていて、そこに漢字の文字がデザイン豊かに染め抜かれているわけで、そのところに彼は注目するのです。「店員の着物にも、のれんと同じ美しい文字があらわれている。どんなに手のこんだ意匠でも、これだけの趣は出せないのではないだろうか。もちろん、装飾的な意図をもって手を加えているとはいえ、これらの表意文字には、意味のない図案では決して持ち得ない、均斉のとれた美しさが迫ってくる」と。何とまあ見事な記述でしょうか。そして彼はこう続けるのです。「表意文字が日本人の脳に作り出す印象というのは、退屈な、ただの音声記号であるアルファベットの組み合わせが西洋人の脳に作り出す印象と、同じものではない。日本人にとって、文字とは、生き生きとした絵なのである。表意文字は生きているのだ」。この表意文字と表音文字の比較というのは、文化論的に非常に重要な点でありまして、ギリシャ由来の西洋の表音文字と漢字による表意文字は別の文字体系を持っており、それを到着したその日に、もちろんある程度の知識はあらかじめあったのだろうけれども、このように記述できることが驚きです。「表意文字は生きているのだ。それらは語りかけ、訴えてくる。そして、日本の通りの空間には、このように目に呼びかけ、人のように笑ったり、顔をしかめたりする、生きた文字が溢れている」などという風に、こうしたことを異国での旅の最初に見て取ることができるものなのではないでしょうか。初めて読んだ時、私は、これはやられたと思いましたね。ハーンは並大抵の人ではないと。

もう一つ、マルチニックでの紀行文を見てみます。関連テキストの2 (pp. 25-26) です。書いているのはラファエル・コンフィアンというクレオール思想の代表的な作家ですが、「すばらしい旅人ラフカディオ・ハーン」という文を書いておりまして、読んでみますと、「熱帯の日没の実体を本当に理解した人———というか正しくは、実体を言葉に書き留めた人———はハーンが最初だ、と突然さとした日のことを私は忘れはしないだろう」と、こうコンフィアンは書き出しています。マルチニックにはプレー山（ペレー山）という山がありまして、これは1902年に火山爆発をして、当時の首都の住民3万人が死んでしまうのですが、その山についての記述です。続くアンダーライン部分に、このプレー山の日没時の様子が書かれています (p. 26)。「そのとき山頂のまわりの空が極度に澄んで輝いていることに気がついた。その後光は魅力的なグレーとピンクで——火山の両側面も穏やかなオレンジ色に包まれていた。それは私の周囲の大地や森の上に

包むように降りてきた層を成す暗闇と鋭い対照をなしていた。実際、空はまだ真昼間なのに、大地はもうほとんど熱帯の夜の神秘的な腕に包まれてしまったのである。その時、3 日前にハーンの『西インド諸島の二年間』で読んだ奇妙な文章を思い出した」、とこうあります。これは、ラフカディオ・ハーンがかつてこのプレー山の日没について書いた文章のことを言っておりまして、後段にその文の引用があります (p. 26)。「こうした熱帯では<夜>は上から暮れるような感じはしない。山頂と山頂が連なるこの土地に<夜>が降りてくる、という気はしない。夜は下から、まるで息を吐き出すかのように、大地から立ち昇る」——。このような独特の日の暮れ方を、現地の人たちも気がついていなかったのです。それをラフカディオ・ハーンは旅先で微妙にかつ鋭くキャッチする。凄いですね。さらにこう続きます。「しかしそれでもその高地の頂上は、島の残りが暗闇のとばりで包まれ星が出始めた後もなお数分の間、その先端で火山のごとく輝き続ける」。つまり周りは全部暗くなって暗闇に包まれてしまうのだけれども、そのプレー山の頂だけはしばらくの間、明るさで包まれているということを適確に記しているわけです。ラファエル・コンフィアンはある日、実際にそのことに気がついて、ラフカディオ・ハーンのこの文書を思い出したのです。ですので、現地の人にも気づかないことをラフカディオ・ハーンは気づく。先ほどのテキストについて言えば、我々は表意文字というものをラフカディオ・ハーンが書いたように普段見ていない。ラフカディオ・ハーン的眼光は実にシャープで非凡です。さらにコンフィアンはこう続けます。「ラフカディオ・ハーンは私たちに古くから伝わる黒人霊能師 quimboiseur の秘密の世界の一つに入り込むことに成功した」と。少し飛んで別のアンダーラインのところにはこう書かれています (p. 26)。「この霊はキリスト教徒の霊のように空に住んではない、そうではなくて昼間はフロマジエ (パンヤの樹) などの御神木の高い枝や梢に眠っている。しかし太陽の最後の光線が輝き始めると、こうした霊たちはたちまちのうちに人々や家や動物や野原を呑み込み暗闇の中にさまよい出る。ハーンはそうしたものの存在を直感した」。ですから、日本にハーンが来て、非常に精神的に豊かなところだと彼が感じたのは、日本の地に宿る様々な精霊を彼はすぐに感知したということとして、マルチニクにおいても同じように彼は精霊をこのように鋭く感知していたということなのです。しかも現地の人の気づかない、風景の中の独特の秘密も見抜いてしまう、そういう眼力を持った人なわけです。

講演メモ (p. 19) の方に戻りますけれども、こうした独特の体験をラフカディオ・ハーンの体験と呼ぶとすれば、その特性として、以下の三つの点が言えるのではないだろうかと思います。一つ目はこうです。ラフカディオ・ハーン的眼は異国の表面をなぞる目ではない。心身もろともその土地の生の深部に入り込んでゆく。その土地を一気に内部から受容しつつ、しかし実はその土地の内部へと受容される。私はこの「受容される」という点に注目をしたいと思います。同化しつつ、つまり外の風景、文化を同化して自分の中に取り入れるのだけれども、それと同時にその土地の風土、精霊というものに同

化されてしまうという、そういう独特の感性を持った人であるわけです。ここに一つ書いておきましたけれども、ドイツの詩人ノヴァーリスに「能動性とは受け入れる能力である」という言葉があります。つまり「受け入れる、外からのものに領有されてしまう」ということは一見受動的なようだけれども、実はそれこそが能動性なのだというわけです。若干逆説的な表現なのですが、ハーンはまさしくノヴァーリスがそう語る能力を持った人なのですね。こうした場合、人は、そういう人を特別視して、普通の人と違うからね、と思ってしまうことがよくあるのですが、そのような際、私はいつもこう言うようにしています。そういう凄い人は別に特別の人なのではなく、彼らは我々の代表者なのだと。つまり我々は、そういうような能力そうした感受性をどこかに眠らせてしまっていて、彼らは我々の代わりとなって、代表として思考し感受してくれているのです。そうでなければ、単に芸術家を崇めるだけで終わってしまいますので、私は、彼らは我々の代表者であると考えるべきでないか、そのように思っております。

それが一つ目だとしますと、二つ目としては、ラフカディオ・ハーンは、その地の「土地の精」を直感し、それと共鳴し、交感し、心身ともにそれと交わる、という点を挙げたいと思います。「交わる」ということについては、これは単にメンタルにではなく、「官能的に交わる」という内容まで含んでいいと思います。土地の精というものについては後で話をしますが、例えば、ああ美しい花だなと思った時、普通は私たちがその美しさにふと気がつくという風に考えられているのですが、自然と一体化したアニミスティックな見方に変えて言えば、それは、花がそういう感受性を持った人に呼びかけているのだ、という風にも見ることはできるのではないのでしょうか。つまり花が美しいと思う時、それは花が呼んでいるのだと。言い換えれば、その人は花のそうした気配を呼び込んでいるのです。そういう感覚能力こそ旅においても、人生においても非常に重要なのであって、ラフカディオ・ハーンはそういう能力に非常に恵まれていたように思います。この「土地の精」でありますけれども、その土地の魂、霊、生命の源であり、そのこの生の根源に宿る霊的な力のことです。英語で言えばGenius of place、フランス語ではGénie du lieuという風に、ヨーロッパでもこういう言葉があるし、当然、世界各地でその土地その土地にこの「土地の精」があるわけです。ですから、「地域振興」といった場合にも、単に表面的に賑やかにすればいいのではなく、それが持続してゆくためには、その土地が長い時間をかけて培ってきたその「土地の精」にまで下りてゆく必要があるだろうということです。実はこの言葉は古く、古代ローマにおいては土地の守護神をラテン語でGenius loci（ゲニウス・ロキ）と呼んでいました。元来どこにもその土地独自の「土地の精」が宿っているということであって、機械文明が進展するに従ってどんどん地上から追われてゆきました。ラフカディオ・ハーンが、マルチニクとか日本に来た時は、そのちょうど移り変わりの時期です。

さて、三つ目に挙げられるのが、こうした体験を可能にする、世界各地の「文化の万華鏡」としてのラフカディオ・ハーンのクレオール的身体です。先ほど彼の生涯を見ま

したように、彼の中にあらゆる文化が万華鏡のように息づいています。このような感性・身体性があったからこそ、その土地その土地に行った時、その「土地の精」を感知し、それと交わり、それを同化しつつ同化されるという独特のハーン的な世界が広がっているわけです。これについては関連テキストの3 (pp. 26-27) をごらん下さい。最近ハリケーンのカトリーナが襲来して大打撃を受けたのですが、人種の交差路の街アメリカ南部のニューオーリンズについて記述したラフカディオ・ハーンの記事です。「百年以上にわたって、ニューオーリンズは放浪の魂を世界の果てからこの地に引き寄せて来た。この歩道を歩いた者の中には、インドや日本で生まれた人がいた。中国人や色黒のマニラ生まれの人もいた。西インドの島々や南アメリカ出身の人もいた。回教主（サルタン）の臣下もイオニア海の船乗りも、ここに家郷を求めて来たのだった。あらゆる文明国がさすらいの子らをここへ送った。北、東、西の諸国のあらゆる町が、神秘的で甘美で誰をも捉える魔力を持った、この遠い南の町へ、安らぎを知らぬ魂を委ねたのだ」。ハーンは文化が混淆し合うこのニューオーリンズがとても気に入ったらしく、ここで10年間暮らします。このニューオーリンズの街を出口として、さらにマルチニックに行ったわけです。

講演メモ (pp. 19-22) の方に戻りますけれども、以上までが前半でありまして、これらをもう一つ掘り下げて、ハーンのマルチニックでの体験と日本での体験を重ね合わせながら見てゆくことにしたいと思います。実は彼のマルチニックでの体験は後に日本文化の基層の探求者となるラフカディオ・ハーンの母体となっています。ですから、マルチニックと日本というのは非常に離れているように思いますが、歴史というのは色々な流れ方をしているのでありまして、「土地の精」という補助線を引いてみるならば、19世紀におけるマルチニックの西インド諸島と日本は、「土地の精」が豊穡に宿る世界有数の地としてつながっており、ハーンは、この二つの地域の「土地の精」に引かれて、マルチニックを訪れ、そして日本にやってきたのだと思います。さて先ずマルチニックの地理的確認をします。[地図を示しながら] カリブ海の地図です。ここがフロリダ半島、これがキューバ。アンティール諸島は、大アンティール、小アンティールからなっていて、群島が非常に美しい弓の形になって連なり、南米大陸（ベネズエラ）につながってゆきます。ここにマルチニックがあります。後でまた話をしますが、この美しい島の連なり、このきれいなカーブ、これを頭に留めておいて下さい。北アメリカと南アメリカがこれらの群島を通してつながっているという、そういう位置関係です。さて、このマルチニックなのですが、面積は沖縄本島ほどで、人口約40万、首都はフォール・ド・フランスです。1902年に島のプレー山が爆発し、当時の首都サン・ピエールは埋没して3万の死者が出ました。では、実際にはどんな島なのか、マルチニックの写真をガイドブックで見てください。これは市場です。そして街角の風景です。若い男が通りがかりの娘に声をかけています。それから、これはマルチニックの女子高生たちです。はじけるくらいに元気です。それからマルチニック風のコロニアルな家。エキ

ゾチックな感じがしますね。これは市役所。フランス国旗の三色旗が立っていて、風景から見るとまるでフランスではないのだけれども、ああ、ここはフランスの領土なんだということが分かります。これは奥地の風景です。実はこの島はうっそうとした樹木で覆われていまして、あそこに見えるのがプレー山です。これは山道をおじさんがロバに乗ってゆったり進んでゆくところ。これは豪快に落ちている滝。それから、いかにも熱帯風の植物、生き物たち。このように非常に美しい。これが浜辺です。樹木がすごく高いです。自然に恵まれた非常に豊かなところで、フランスが手離したくないというのがよく分かります。これはカリブの女性たちですけれども、混血ですので非常に美しい人が多く、つい立ち止まって見てしまうことがよくあります。混血でありクレオールです。これを見て下さい。このようにうっそうとした山が広がっています。靈気が漂うような世界です。実は私は数年前に2週間ほどここに滞在したことがあるのですが、その時の写真も見てみます。これは友人となった画家のアトリエで、山の中にあるのです。アトリエと言っても、我々が普通に意識をするアトリエとは全く違って、自然の中の山小屋のような感じです。ハンモックが見えますが、あそこで眠っているのは実は私です。なぜこのような島に行ったのか言いますと、別にラフカディオ・ハーンのためではなくて、この写真を見て下さい、この右側にいるのは私なのですが、ここにいるおじいちゃん、この人が大変に有名なエメ・セゼールという詩人です。この時90歳ぐらいなのですが、マルチニック島出身で、20世紀を代表する詩人のひとりとなっています。この詩人のことを調べるために私はマルチニックに行きまして、ここにいる画家のセルジュ（先ほどのアトリエの所有者で、札幌にいるフランス人の友人が紹介してくれました）が、こうしてセゼールと面会する機会をつくってくれました。さて、これは植物園です。中央に写っているのが私ですが、ご覧のように熱帯の樹木が生い茂っていて見飽きないところです。あと一つ、実際にラフカディオ・ハーンが撮っている写真をお見せしたいと思います。彼はなかなかのカメラマンでして、この写真は、顔ははっきり見えないのですが頭の上に物を載せて運ぶマルチニックの若い女性です。建物の壁の感じも面白いし、この写真から、ラフカディオ・ハーンはかなりのカメラマンだということが分かります。それからこれは当時の海岸の風景です。さて、また混血の女性が出てきました。ユニークな衣装を身に着けた混血美人たちです。このようにマルチニックは非常に興味深いところです。歴史を確認しておきますと、17世紀にフランス領となります。悲劇的なのは、イギリス、フランス、スペインの攻撃によって先住民が全滅してしまうことです。この全滅ということにご注意下さい。その結果、プランテーションの奴隷労働者として、最初はアフリカ大陸から、後にインド、中国など各地から移住してきて、一大混血が進みました。こうした歴史的・文化的背景が文化の異種混雑を掲げる近年のクレオール思想の母胎となっており、現代思想、現在の文化論に多大な影響を与えています。言語はフランス語およびフランス語系のクレオール語です。

ハーンの日本での体験は、このマルチニックでの体験が母胎となっています。日本へ

の移住は、このマルチニックの滞在の延長上にあるということです。これについての記述が、関連テキストの 4 (p. 27) です。これは平川祐弘氏のこのタイトルの本の中に収められていまして、実はゴーガンがちょうどこの時マルチニックに寄っているのです。知り合いになったわけではないのですが、ちょうど同じ時期に彼ら 2 人はいたわけですから。そのことについて平川氏はこう書いています。「ゴーガンにとってプレー山 [まだ爆発する以前のプレー山です] を描くことはジャポニスムと同一の芸術運動に属する行為だった。その証拠にプレー山の一連のスケッチは日本の扇子の形をした中に描かれている。実はゴーガンとハーンは、同じ時期に同じサン・ピエールの街で、数百メートル離れた場所に住んでいた。そしてハーンは来日以前だったが、プレー山を眺めてこんなことを呟いた。それはさながらプレー山をスケッチするゴーガンをふと見かけでもしたような、そんな感想である」——。そのハーンの言葉を見てみましょう。こう書かれています。

「時々、プレー山を眺めているとく富嶽百景>を描いたあの偉大な日本の絵師と似た仕事を誰かクレオールがやってくれないか、などと私は思った。あの日本人の絵師と同じくらいに生まれ故郷の丘や山に愛着と誇りがあり、平野の熱気も蛇も怖れないような人」——。ということで、後にもう日本に行くことを予告しているような、そのようなハーンの記述です。そして現に彼は日本にやって来るわけです。

ではそのマルチニックと日本と共通の基盤とは何なのか、ということをもとめてみますと、まずは先ほど述べた「土地の精」ということでして、関連テキストの 5、6、7 (pp. 27-28) には、ハーンがマルチニックと日本に見て取ったものの共通点が明確に出ています。テキストの 5 ですが、ハーンは、怪談とか幽霊とかそういう不思議な話を色々書いたのだけれども、「マルチニックは魑魅魍魎が住む島である」と書いていますね。ラフカディオ・ハーンはこの島に非常に興味を持っていて、マルチニックの民話をたくさん収集しています。後に日本で民話や怪奇話を収集して本を書いたのと同様です。テキスト 6 (p. 28) にゆきますが、それと結びついた内容のことを「東洋の第一日目」で彼は言っております。読んでみますと、「私は、神道の象徴である鳥居の前に立っている。これまで絵でしか見たことのなかった鳥居を、初めて見たのである。写真や版画でさえ一度も鳥居を目にしたことのない人に、どう説明すればいいだろう」。とこう語りつつ、非常に見事な言葉でこう書いております。「壮大な鳥居を初めて見た人は、もしかしたら、空に向かってそびえ立つ、美しい漢字の巨大な模型を見た、と想像するかもしれない」——。何と透視力豊かな感性でしょうか。「鳥居の持つすべての線に、生き生きとした表意文字の品格があり、書の大家が四回筆を揮って書いたような、大胆な角度と曲線を感じさせるからである」。鳥居の形を、書道の筆の動きに例えて言っているところが凄いですね。それから表意文字というのが出てきます。つまりは、日本の神道が精霊の世界であることを、彼はずばりと見抜いているわけです。西田幾多郎という有名な哲学者がいますが、この人がラフカディオ・ハーンについて書いていまして、見てみますと (テキスト 7: p. 28)、「ヘルン氏 [ハーンのこと] は万象の背後に心靈の活動

を見るといふ様な一種深い神秘思想を抱いた文学者であった。かれは我々の単純なる感覚や感情の奥に過去幾千年来の生の脈搏を感じたのみならず、肉体的表情の一々の上にも先祖以来幾世の霊の活動を見た。[……] 我々の肉体は無限の過去から現世に連なるはてしなき心靈の柱のこなたの一端に過ぎない、この肉体は無限なる心靈の群衆の物質的漂徴である」。こういうわけです。西田幾多郎は、ハーンのこのような「万象の背後に心靈の活動を見る」という立場を「物活論」と呼んでいました。マルチニックでみた精霊の世界を日本でも、それももっと濃密に感じたということになります。

さらにもう一つ加えますと、「一神教的世界に変わる生のあり方」というのをマルチニックにも日本にも見出したことが挙げられます。この一神教的世界というのは西洋近代世界なのですが、神すなわち創造主があり、人間と自然は神が創り賜うた被創造物であって、この人間が「主体」としてその自然に働きかけ、人間が自然を変えていくという世界像です。自然を人間が支配し、神がその全体を統べるというわけで、超越的主体が世界を司っているという世界観です。マルチニックあるいは日本そして多くの非西洋世界では——ここがポイントだと思うのですが——生命（人間、生きもの、万物）は宇宙的流動的な実体であり、その全体を自然と呼びます。全体が一つにつながっている、すべてがつながっている。それをつなげているのが霊、すなわち「世界の、宇宙の精」であるわけです。ラフカディオ・ハーンは小さい時からギリシャ神話を母に聞かせてもらって親しんでいましたし、その後長じて、世界中の民間伝承、マルチニックの民話、日本の怪異譚や神道的世界（アニミズム）を深く探求したのも、実はラフカディオ・ハーンは自身が生きてきた一神教的世界から脱出したかったからであって、その脱出行が彼の旅行であったように思います。そうした意味では、ハーンは西洋的世界基準に代わる別の基準の提出者であると言えるわけで、別様に言えば、現在のグローバリゼーションの先験的な批判者であったわけです。そのためでしょう、ラフカディオ・ハーンは、キリスト教徒ではなく仏教徒として埋葬されています。

さらにもう一つ、私がつけ加えたいのは、文化における異種混淆、クレオール性ということです。マルチニックはクレオールの典型的な例ということですが、日本もそういう風にして見た方が有益なのではないかということとして、ハーンは確かに当時の日本の西洋化を批判しているとはいえ、我々としては、中国、東洋文化圏とアニミズム的世界との習合・交雑文化であった日本が、さらにこの西洋という世界と交配しクレオール化していったという風にとらえた方が生産的ではないかということです。日本は近代における「文化の異種混淆」の世界的な舞台なのであって、「極東にして極西」、すなわち東西の文化の万華鏡を生きてきたはずなのです。ここに日本の文化資源、観光資源を考える上の重要なポイントがあるのではないかと思います。マルチニックと日本はこのようにクレオール性において世界史的な文脈として実はつながっています。コロンブスの航海を思い出して下さい。コロンブスは、インドをめざし、その向こうあるジパングを求めて、西インド諸島に到着したのです。西インド諸島とジパングは文明史的にはこ

ういう見えない糸でつながっているわけです。ラフカディオ・ハーンがマルチニックの後に日本にやって来たというのは、こういう点を考えると、どこか必然の足取りであったような気が私はするのです。

そろそろまとめに入りたいと思いますが、以上見てきましたように、ラフカディオ・ハーンは、「間を生きる人」、「間をつなぐ人」であるということが言えます。「人間」という言葉には「間」という言葉が入っていますが、その意味で彼はまさしく「人間」、「間を生きる人」であったわけです。ハーンの文化観を定式化して言えば、文化Aと文化Bの「間を生きる」ことによって、AでもなくBでもなく、双方を内包しつつ、かつそれらとは別のCを生み出すということです。彼の中ではそれが「創造」として考えられているはずですが、重要な点を確認しておきたいと思いますが、こうした創造は、AとBとが単に混ざり合うということではありません。クレオール思想の代表であるグリッサンによれば、混ざり合うこと、すなわち混血とクレオールとは別のものであって、クレオールとは、AとBとの接触から、双方とは異なった新しい価値が生み出されることです。換言すれば、それは「混合」ではなく「化合」なのです。つまり足し算ではなく掛け算であります。このように文化相互を掛け合わせて別の価値を生み出すこと、これがラフカディオ・ハーンにおける創造の一番の秘密ではないかと思います。彼の生涯が何よりもその雄弁な体现であったし、それを可能にしたのが彼の旅でした。さらにつけ加えれば、ハーンの文学作品は、題材は日本である一方、英語で書かれていることによって、仕上がりは西洋です。西洋でもなく東洋でもなく、かつその双方であるわけです。文化Aと文化Bを掛け合わせて、そのどちらでもなく、かつその両方を含むCを創り出しています。それと関連した例を挙げますと、彼の外国語観にもこうした考えが表われています。東大の日本語日本文学の研究者であるチェンバレンに宛てた書簡の中で、ハーンは「外国語の使用は[……]、[二つの文化の]境界と重なり合い、——まだ未知の広がりをもつ漠然とした領域へとあふれて流れてゆくのです」と書いています。つまり「外国語の使用」は、言語Aでも言語Bでもない「二つの文化が重なり合う、まだ未知の広がり」すなわちCにつながってゆくということなのです。そうした可能性を持つことが実は外国語の使用ではないかというのが彼の考え方で、ここには実に含蓄深いものが含まれています。また、ハーンは後に東大の英文科講師となるのですが、東大での講義録に「偉大な文学は、二つの異なった民族の結婚から生まれる」という有名な言葉があります。この言葉にもこれまで述べてきたハーンの文化観が明確に表われているように思われます。このように、「創造」において本質をなすのは、「外部」の関与です。ハーンという外部者のおかげで、我々はどれだけ豊かに我々自身を知ることができるようになったことでしょうか。私自身もハーンの眼を通して、日本のことを、どれだけたくさん知ったことでしょうか。つまり外部の関与、外部の眼が人を創り直してくれるわけなのです。一方、ラフカディオ・ハーンは、どの異国の文化にも深く関心を抱くとともに、その向こうに、それぞれの文化相互を全体的につないでいる根源的なものを信じて

いました。それを示すのが最後のテキストの 8 (pp. 28-29) です。静岡の焼津の沖を泳いだ時の彼の記述です。何気ない静岡の夜の海、そこを精霊流しの燈籠とともに泳いでいる時に、小さい頃の自分が経験した海、そしてかつて滞在した世界の様々な土地の海、それらと共通なものを、彼は海の向こうから聴き取ったと書いています。この文章の最後のところを読みます。「海の様々な発言に合わせて、魂の経験という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである」。これは、「すべてはつながっている」という生命の時空的な一体性、宇宙性の体験だったのでしょう。実に深い感受性を持った人であると思います。

以上、ラフカディオ・ハーンについて話してきましたけれども、最後に北海道との関連で少し述べておきたいと思います。ラフカディオ・ハーンを観光創造論的にとらえ返すならば、どういうことが導き出せるだろうかということです。一つ目は、人はその「土地の精」を求めて、その「土地の精」に惹かれて、その土地を訪れるということです。ラフカディオ・ハーンはまさにその体现者であると言えます。この「土地の精」というのは、広い意味で考えるならば、その土地の自然、風土、風景、生活、食、文化を生み出している根源の力、その精髓、エッセンス、魂のことです。過去に形成され、現在も生きており、将来においても意識されてゆく、そういうものとしてとらえたいと思います。観光において地域振興を考えるベースにも、こうした考えが必ずや込められていなければならないと思います。最近出た本で、岡村民夫氏の『イーハトーブ温泉学』という本がありますが、これは、宮沢賢治が花巻に眠る「土地の精」すなわち温泉を、まさしく地の精（大地の巨大なエネルギー）と人間との交流の場として、パブリックスペース化、リゾート郷化しようと試みていたことを書いたものです。それは今日から見て実に先見的な試みでした。そしてもう一つつけ加えたいと思います。先ほど外部の眼の重要性を指摘しましたように、この「土地の精」は「外からの者」によって目覚め、共有され、再創造されるということです。

こうした点を北海道との関連で言うならば、私はここに住んで 30 年経つのですけれども、非常に魅力的なところだと思っています。北海道は「土地の精」の宝庫です。おそらくそれは三層からなっていて、まずは基層としてアイヌの生活文化があります。アイヌこそは北海道の「土地の精」の原創造者です。それから開拓時代。「フロンティアの開拓」のもとで、日本と西洋とのクレオール的な異種混雑が進みました。これを新しい層としましょう。そして私としては、さらにもう一つ、もう少し大きなスケールで、世界の中における北海道の地政学的位置という点から考えてみたいと思います。すなわち、先ほどマルチニック含む西インド諸島が非常に美しい弧となって連なっていることを話しました。日本全体を、つまり北海道、本州、四国、九州をもう少し南北に広い目で見ると、それは、サハリン（そして千島列島）からずっとつながってきて、九州から沖縄へと続き、台湾に連なり、全体は西インド諸島と同じような美しい弧となって、東南アジアにつながっていることが分かります。すなわち、日本はユーラシア東部に存在

する長大な列島の中に位置しているということです。このことは日本の地政学的位置として非常に重要な点で、本来はこうした地政学的な観点から日本のあり方を考えるべきなのですが、それはまた別の機会に譲るとして、こうした列島の弧において、北海道はその北寄りにあります。つまり、地政学的位置から言えば、北海道は、ロシア北東ユーラシアと東南アジアをつなぐ橋になる位置を占めているのです。北海道はサハリンを介して、北東ユーラシアにつながっている。「北の大地」と言うけれども、それは本州から見ただけの話であって、ロシアから見ると南の温暖な地です。緯度的にもそうです。「北の都」札幌と言われていますが、ヨーロッパに持っていきますと南フランスの位置です。パリは何とサハリンと同じほどの北にあります。かつてオホーツク文化が10世紀頃まであったということですが、北海道をこうしたユーラシア北東部の広がりの中で見れば、この圏独自の「土地の精」がさらに豊富に豊穡に見出せるはずで、サハリンとユーラシア大陸の間は間宮海峡（タタール海峡）と呼ばれておりますが、この海峡は非常に狭く数キロほどです。実はソ連の時代にこの海峡をトンネルでつなごうというプロジェクトがありました。プーチンの時代にも、そういうプロジェクトがあったとのこと。要するにユーラシアとサハリンをトンネルで結ぶことは難しくはない。そしてサハリンと北海道の間に宗谷海峡があります。宗谷海峡の距離は、青函トンネルが通っている津軽海峡と大体同じです。つまりはサハリンを経由して北海道とロシアをトンネルでつなぐことはその気になればできるわけです。とは言っても、日本とロシアとの今の状況では、政治的にも経済的にもかつ軍事的にも実に難しい話なのではありますけれども、ある一つの展望というか、将来的な考え方として、このトンネルの話には、私は非常に興味があるのです。講演メモ（p. 21）のところに、「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」という一行詩を載せておきましたが、これは安西冬衛という大正昭和の詩人のもので、彼は満州、大連に渡りまして、この詩を書いたのは1929年です。日本の歴史を考えてみますと、大陸とどうつながるかということが根幹にあり、それは漢字文化圏として形成されてゆく時代から近年の太平洋戦争まで、そして今後も、この国の基本的な位置構えとして実に大事なテーマであると思います。そうした意味で、「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」というこの詩は、大陸に渡った安西冬衛という一詩人の心象スケッチを越えて、あえて言うならば、日本の置かれている地理全体の、日本の歴史全体の、日本の文化全体の、日本のあり方全体についての、何やら実に味わい深いシンボリックなイメージを喚起しているように思われるのです。この「てふてふ」（蝶々）ですが何色にイメージされますか。白と思う人が多いかもしれませんね。私は黄色でとらえたいと思っていますが。

さて、以上述べた3つの層が重層的に融合すれば、この北海道独自の「土地の精」とその「文明の磁力」（これは石森先生の言葉ですが）に牽引されて、道外から、そして中国、台湾、韓国、ロシア、欧米など海外から、人々はきっと北海道にやってくるはずで、そうした新たな試みとして一つ紹介しておきたいのは、昨年創刊された雑

誌『カイ』です。編集者の一人でカメラマンの露口啓二さんという人がいるのですが、この方は北海道の「土地の精」の探求者であると思いました。この方は北海道の地名に注目して——北海道の地名こそアイヌが源流ですね、札幌という言葉もそうです。アイヌの言葉に漢字をあてていったのですが、そうした地名を通して、かつての「精」がひっそりと生き続けているわけで、こうしたクレオール性もなかなか興味深いと思います——我々の生きているこの北海道の文化の重層性を探っておられます。

最後になりますけれども、我々の専攻名に冠されている「観光創造」の「創造」という言葉、この「創造 creativity」こそ、21 世紀のキーワードです。「観光創造」とか「創造都市」とかという風に語られるように、この「創造」という言葉を通して、どの分野においても従来までの枠組みの組み換えが求められています。私はよく言うのですが、これは、恐竜の時代から哺乳類の時代が変わる、そういうことを示しているように思います。重厚長大のものから、知恵と豊かな感性を持った新種の生き物が現れてくる、そういう変化の時代です。「観光創造」も、おそらくこのことと共鳴しているはずです。先に述べましたように、創造というのは、異なったものの相互の結合です。しかも「混合」ではなく「化合」です。それまでまったく関係なかったものをつないで新たな構造をつくること、環境を一気に模様替えをして、再起動させること。私は 20 世紀の芸術を専門にしてきたのですが、創造の基本原理とは、20 世紀の詩・アートの創造原理がそうであったように、異なったもの同士をつなぐことに存しています。それは文化論においても成り立つわけですし、ラフカディオ・ハーンの旅は、そうした今日的な創造を、先駆的に、生き方そのものを通して体現したものであった、というのが私の結論です。ご静聴どうもありがとうございました。

◆添付資料◆

※当日配布された資料を、本叢書用に整形・再録

講演メモ：	ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造	
	——観光創造を考えるためのひとつの原石として	
		……19-22
資料 1：	日本到着までのラフカディオ・ハーンの旅（移動）の足取り	
		……23-24
資料 2：	関連テキスト	
		……25-29

2009 観光創造フォーラム(09/02/27) 講演メモ
 大平 具彦

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造

——観光創造を考えるためのひとつの原石として

1. なぜラフカディオ・ハーンなのか——問題設定

- ・日本に帰化して小泉八雲となり、『怪談』をはじめ日本の文化地層の深き理解者として知られるラフカディオ・ハーン、しかし(日本到着するまで、そして到着後も)彼は、実は、旅人の中の旅人。
- ・後に見るように、LH(以下、ラフカディオ・ハーンを場合に応じ LH と表記)の内部では、旅先で吸収した世界中の文化地層が渾然となって渦巻いている→今日のクレオール思想(一神教的な単一原理に代わる<文化の異種混雑>の思想)の先駆的体现者。西洋的世界基準とは別の基準の提出者。
- ・そして彼は(日本においてもそうであったように)旅先で、必ず、新たな世界を創造し、それまでとは異なる自己を新たに創造している。この「ラフカディオ・ハーンの体験」とはいかなる体験なのか。
- ・よって、この LH 的体験には、観光創造を考えるための「原石」が豊かに眠っているのではないか。

2. 永遠の旅人ラフカディオ・ハーン、その旅の足取り

→ [資料1](#) 参照

3. ラフカディオ・ハーンの体験とは

- ・LH は、新たな土地に行くと、必ずその土地から養分を深部から吸い込んで、その土地の人間も気づかないでいた新たな世界を創造し、そのことを通して、自己をもまた新しく再創造してゆく。
 - ←何よりも、彼の「旅の足取り」が語っているように、彼の生そのものがその体现であった。
 - ←具体的例として: [資料2](#) 「関連テキスト」(1)、(2)参照
- ・こうした独特の体験を「ラフカディオ・ハーンの体験」と呼ぶとすれば、その特性とは——
 - 1) LH の眼は異国の表面をなぞる眼ではない。心身もろともその土地の生の深部に入り込んでゆく。
 - (その土地を)一気に内部から受容しつつ、しかし実は(その土地の)内部へと受容される。
 - ←同化しつつ、かつ同化されてしまうメンタリティー、感性
 - cf.「能動性とは受け容れる[=他者に領有される]能力である」(ドイツの詩人ノヴァーリスの言葉)
 - 2) LH はその地の「土地の精」を直感し、それと共鳴し、交感し、(心身ともに)それと交わる。
 - ←「土地の精」:その土地の魂、霊、生命の源。その生の根源に宿る霊的な力。(Genius of place [英]、Génie du lieu[仏] ←Genius loci ^{ゲニウス ロキ} [ラテン語、古代ローマにおける土地の守護神])
 - 3) こうした体験を可能にする、世界各地の「文化の万華鏡」としての LH のクレオールの身体。
 - [資料2](#) 「関連テキスト」(3)
- では、これをもうひとつ掘り下げて、LH のマルチニックでの体験と日本での体験を重ね合わせながら、見てゆくことにする。実は彼のマルチニックでの体験は、後に日本文化の基層の探求者となるラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の母胎となっている。(←19 世紀におけるマルチニック[西イ

講演メモ

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

インド諸島」と日本:「土地の精」が豊饒に宿る世界有数の地としてつながっている。)

4. ラフカディオ・ハーンとマルチニック／ラフカディオ・ハーンと日本

・マルチニックについて

- カリブ海西インド諸島にあるフランス領海外県、面積は沖縄本島ほど、人口約40万。首都フォール・ド・フランス（1902年、島のペレー[プレー]山が爆発、当時の首都サン・ピエールは埋没、死者3万）。
- 地理的確認、現地の写真、LHの撮った写真
- 17世紀にフランス領。英、仏、西の攻撃で先住民は全滅、白人(フランス人)の経営するプランテーションの奴隷労働者として最初はアフリカから大量に移送され、後にインド、中国など各地から移住、一大混血が進んだ。こうした歴史的文化的背景は、文化の＜異種混血＞を掲げる近年のクレオール思想の母胎となっており、現代思想、現在の文化論に多大な影響を与えている。なお言語はフランス語、(フランス語系)クレオール語。(cf.大平「仏領海外県マルチニック&ブラジル出張報告記」([2003年夏に研究出張で1週間滞在]、『国際広報メディアジャーナル』No2、2004)

・LHのマルチニックでの体験は、彼の日本での体験の母胎

→資料2「関連テキスト」(4)参照

では、LHがマルチニックと日本に見て取った共通の基盤とは何なのか。

1)「土地の精」

→資料2「関連テキスト」(5)(6)(7)参照

2)一神教的世界に代わる生のあり方

一神教的世界(西洋近代世界):神(創造主)＞人間(近代的主体)／自然

←自然を人間が支配し、神がその全体を統べる(支配する):「超越的主体」が世界を司る

マルチニック、日本(非西洋世界):生命(人間、生きもの、万物)＝宇宙的流動的な実体＝自然

←「すべてはつながっている」:それをつなげているのが「霊」、すなわち「世界の、宇宙の精」

←LHがギリシャ神話(←母の世界)をはじめ、世界の民間伝承、マルチニック民話、日本の怪異譚や神道的世界(アニミズム、万物に精霊が宿る)を深く探究したのはそのため。

LH:一神教世界からの脱出者、その脱出行が彼の旅行、西洋的世界基準にかわる別の基準の提出者。(←現在のグローバリゼーションの先駆的な批判者)

(そして、さらに、もう一点加えていいのではないか、すなわち――)

3)文化における異種混血性、クレオール性

-確かに、LHは当時の日本の西洋化を批判。しかし、われわれとしては、これを、中国(東洋)文化圏とアニミズム的世界との習合・^{ハイブリッド}雑種文化(＝クレオール)であった日本の、さらなるクレオール化と考える方が生産的ではないか。

-日本は近代における文化の異種混血＞の世界的な舞台:「極東にして極西」、日本こそ東西の文化の万華鏡

→こうしてマルチニックと日本は世界史的な文脈として実はつながっている ←cf.コロンブス:インド、ジパングを求めて西インド諸島に到着

- ・LH:「間を生きる人」、「間をつなぐ人」(←人間)
 - LH の文化観:文化 A、文化 B の間を生きることによって、A でもなく B でもなく、双方を内包しつつ、かつそれらとは別の C を生み出すことが創造。(単なる「混合」でなく「化合」)
 - ←彼の生涯が何よりもその雄弁な体现。それを可能にしたのが彼の旅。さらにつけ加えれば、
 - *LH の文学作品:題材は日本、仕上がりは西洋(英語)→西洋でもなく東洋でもなく、かつその双方
 - *LH の外国語観:「外国語の使用は[……]、[二つの文化の]境界と重なり合い、——まだ未知の広がりをもつ漠然とした領域へとあふれて流れてゆくのです」(チェンバレン宛て書簡)。
 - *東大での LH の講義:「偉大な文学は、二つの異なった民族の結婚から生まれる。」
 - ←このように「創造」における「外部」の関与の本質的重要性。LH という「外部者」のおかげで、われわれはどれだけ豊かに、われわれ自身を知ることができるようになったことか。
 - 一方 LH は、それぞれの文化相互の間を全体的につなげている根源的なものを信じていた。
 - 資料2「関連テキスト」(8)参照
 - 「すべてはつながっている」←生命の時空的な一体性、宇宙性

5. 北海道との関連で

- ・LH を観光創造論的に捉え返すならば——
 - 人はその「土地の精」を求めて、その「土地の精」に惹かれて、その土地を訪れる。
 - 「土地の精」とは、広い意味で言えば、その土地の自然、風土、風景、生活、食、文化を生み出している根源の力(精髓、エッセンス、魂)。
 - [最近の岡村民夫『イーハトーブ温泉学』—宮澤賢治:花巻に眠る「土地の精」(温泉＝地の精、大地の巨大エネルギーと人との交流の場)のパブリックスペース化、リゾート郷化。今日から見て先見的試み]
 - そしてその「土地の精」は、「外からの者」によって目覚め、共有され、再創造される(←クレオール)。
- ・北海道は「土地の精」の宝庫
 - それは三層からなるだろう。
 - 1) アイヌの生活文化:アイヌこそは北海道の「土地の精」の原創造者。(基層)
 - 2) 開拓時代:北海道「フロンティア」のもとでの日本と西洋との異種混雑。(新層)
 - 3) 北海道の地政学的位置:ロシア・北東ユーラシアと東南アジアとをつなぐ橋。(将来層)
 - ←日本列島:サハリンから台湾に至るまでの美しい弧の群島(cf.マルチニク:北米・中米と南米をつなぐ美しい弧アンチール群島にある)、北海道はサハリンを介して北東ユーラシアにつながる(cf.沖縄:台湾を介して東南アジアとつながる)。
 - 北海道をこうした広がりの中で見れば、この圏独自の「土地の精」がさらに豊富に見出せるはず。
 - ←「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行つた」(安西冬衛)
 - *この三層が重層的に融合すれば、この北海道独自の「土地の精」とその「文明の磁力」(←石森)に牽引されて、道外から、海外から(中国、台湾、韓国、ロシア、欧米から)、人々はきっと北海道にやってくるはず。
 - *新しい試み:昨年創刊された雑誌『カイ』(KAI)、その編集者の一人、写真家、露口啓二:アイヌの「土地の精」の探求者(←北海道の「地名」に着目。北海道の地名こそアイヌが源流)。

講演メモ

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

・観光創造／創造

- 「創造 creativity」こそ 21 世紀のキーワード:「観光創造」、「創造都市」、——どの分野においても従来までの枠組みの組み換えが求められている。←「恐竜の時代から哺乳類の時代へ」
- 創造:異なったもの相互の結合、ただし「混合」ではなく「化合」。(←それまで関係なかったものをつないで新たな構造をつくること、環境の模様替え・再設定)。←20 世紀の詩・アート of 創造原理
- LH の旅は、こうした今日的な創造を、先駆的に、生そのものを通して体現したものであった。

日本到着までのラフカディオ・ハーンの旅（移動）の足取り

	旅／移動	著作／Inner Trip
1850 年	ギリシャのイオニア諸島レフカス島（レフカダ島）に生まれる。父はアイルランド出身イギリス軍軍医、母はマルタ島生まれでアラブの血も混じっていると伝えられるギリシャ人。（出生からすでに文化的混血）	* <u>Lafcadio Hearn</u> という名：シンボリックな事実（←「名は体を表す」） ・ <u>Lafcadio</u> ←生地レフカダ島（ギリシャ語で「さまよう」の意）に由来 ・ <u>Hearn</u> ←中世英語 <u>erren</u> ←ラテン語 <u>errare</u> （「漂泊する」の意）に由来
1851（01 歳）	父の西インド諸島転属のため、母と女中（兼通訳）に伴われ、父の生家のあるダブリンに到着。後、両親は離婚、母はギリシャに帰国し、大叔母に引き取られる。	幼年の頃から民話、神話、怪奇話などに異常な関心を示す。
1863（13 歳）	英国本土、北東部のダラム州にあるカトリック系カスパート神学校（現ダラム大）に入学。（遊戯中あやまって左目を失明）	
1867（17 歳）	大叔母の破産のため、遠縁の世話で北フランスのイヴトーにあるカトリック系の学校に入学。	ゴーチエ、フローベール、ボードレールなどのフランス文学に親しむ。
1869（19 歳）	アメリカに渡る。ニューヨークを経てオハイオ州シンシナティに移住。	各種の仕事を見つけては窮乏生活を続ける中、図書館で読書にふける。
1874（24 歳）	『シンシナティ・インクワイアラー』紙の記者。後、下宿先の炊事婦、混血黒人マッティ・フォリーとの結婚がもとで解雇（当時黒人との結婚は禁じられていた）。	記者となってから、下層社会とくに黒人の風俗を好んで書く。
1876（26 歳）	雑誌『シンシナティ・コマーシャル』の記者となり、生活も安定する。	ゴーチエその他のフランス文学の翻訳に打ち込む。
1877（27 歳）	新たな変化を求めて、ルイジアナ州ニューオーリンズに移住し、新聞記者を色々経ながら、各文化が混血し合うこの町で 10 年間に過ごし、後のラフカディオ・ハーンの基本となる作品を多数発表。	混血文化（クレオール文化）に深い関心を抱く。関連記事を多数執筆。 ゴーチエ、モーパッサン、アナトール・フランス、ボードレール、ロチなどのフランス文学、ツルゲーネフ、ドストエフスキーなどのロシア文学の翻訳紹介。 <u>『異文学遺文集』</u> （エジプト、エスキモ、インド、フィンランド、アラビア、ユダヤなどの民俗伝承再話集） ニューオーリンズでの万国産業博覧会（1884 年）で日本に関心を持つ。『古事記』（チェンバレン訳）を読む。 『ニューオーリンズの歴史的スケッチ』 クレオール俚語集『ゴンボ・ゼーベス』 『クレオール料理法』 『中国怪談集』

資料 1

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
 大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
 © OHIRA Tomohiko, 2009

1887 (37 歳)	<u>西洋以外の未知の世界を求めて、ニューオーリンズを離れてカリブ海西インド諸島のひとつ仏領マルチニック島に渡り、そこで2年間を過ごす。</u>	<u>マルチニックの熱帯美、クレオール混血文化に魅せられる。紀行文、見聞記のほか、ニューオーリンズやマルチニックに想を得た小説（『チータ』、『ユーマ』）執筆。</u> <u>マルチニックの民話を収集。</u>
1889 (39 歳)	アメリカ（フィラデルフィア）に戻り、マルチニック滞在時の体験と記録をもとに執筆に励む。	『チータ』（1889）、『ユーマ』（1890）、紀行文集『 <u>仏領西インド諸島の二年間</u> 』（1890）出版。
1890 (40 歳)	それまでの著作、マルチニック紀行文などが評価され、ニューヨークの『ハーパーズ・マンズリー』誌の学芸記者として日本に派遣され横浜到着。 <u>（その後、日本においても、横浜→松江→熊本→神戸→東京と移住、その間、日本各地を旅行。）</u>	（紀行文「東洋の第一日目」〔発表は1892年〕）

[小泉八雲（上田和夫訳）『小泉八雲集』、新潮文庫、上田和夫編巻末年譜をもとに作成]

関連テキスト（以下、下線部は大平）

(1) ラフカディオ・ハーン「東洋の第一日目」(ラフカディオ・ハーン・池田雅之訳『新編 日本の面影』、角川ソフィア文庫、2008、pp.14-15)

[……]これまでまったく未知だった世界を、この目はたしかに見ている。そんな当たり前の事実を十分承知しながらも、私はどこかうっとりとしていた。その日のあまりの神々しい美しさに、私の意識も尋常ではなかった。日本の春のひんやりした、雪を頂く富士の高嶺から風の波が運んでくる、その朝の空気には、言葉にならない魅力があった。それは、むしろはっきりした色調というより、やさしい透明感による魅力ではないだろうか。異常なまでに澄み渡る、その青味を帯びた空気の透明感に、遠くのものまで驚くほどくっきりと見えている。[……]

まるでなにもかも、小さな妖精の国のような。人も物もみんな小さく、風変わりで神秘的である。青い屋根の小さな家屋、青いのれんのかかった小さな店舗、その前で青い着物姿の小柄な売り子が微笑んでいる。そんな幻想を打ち砕くのは、ときどきすれ違う背の高い外国人と、さまざまな店の英字看板だけである。しかしながら、そんな目障りなものも、現実感を強調するだけで、この面白い小さな通りの魅力が、それで著しく損なわれることは断じてない。

[……]

小さな店舗の様子もわかってきた。どこも、路面より高く上がったところに畳敷きの床があり、看板の文字はたいてい縦書きで、布の上で波打っているか、金色の塗り板の上できらめいている。着物の多数を占める濃紺色は、のれんにも同じように幅を利かせている。もちろん、明るい青、白、赤といった他の色味もちろはら見かけが、緑や黄色のものはない。それから、店員の着物にも、のれんと同じ美しい文字があしらわれている。どんなに手のこんだ意匠でも、これだけの趣は出せないのではないだろうか。もちろん、装飾的な意図をもって手を加えているとはいえ、これらの表意文字には、意味のない図案では決して持ち得ない、均斉のとれた美しさが迫ってくる。

[……]

表意文字が日本人の脳に作り出す印象というのは、退屈な、ただの音声記号であるアルファベットの組み合わせが西洋人の脳に作り出す印象と、同じものではない。日本人にとって、文字とは、生き生きとした絵なのである。表意文字は生きているのだ。それらは語りかけ、訴えてくる。そして、日本の通りの空間には、このように目に呼びかけ、人のように笑ったり、顔をしかめたりする、生きた文字が溢れている。

(2) ラファエル・コンフィアン「素晴らしき旅人ラフカディオ・ハーン」(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004、pp.328-330)

熱帯の日没の実体を本当に理解した人———というか正しくは、実体を言葉に書きとめた人———はハーンが最初だ、と突然さとした日のことを私は忘れはしないだろう。このイギリス・ギリシャ系の新聞記者は、詩人で、民俗研究者で、日々の生活を記録した。その人が私の母国であるマルティニークを19世紀の末近くに訪れ、日没を言葉に書きとめたのだが、それは驚くべき見事さである。[……]私がそのことをさとしたのはある4月の一日の終わりで、私たち島の住民が「たそがれ」と呼

資料 2

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

ぶこともためらうほど劇的に短い瞬間のことである。私はプレー山の頂上を眺めていた。これは1902年に噴火してマルティニークの旧都サン・ピエールの住民3万人を全滅させてしまった火山である。そのとき山頂のまわりの空が極度に澄んで輝いていることに気がついた。その後光は魅力的なグレーとピンクで——火山の両側面も穏やかなオレンジ色に包まれていた。それは私の周囲の大地や森の上に包み込むよう降りてきた層を成す暗闇と鋭い対照をなしていた。実際、空はまだ真昼間なのに、大地はもうほとんど熱帯の夜の神秘的腕に包まれてしまったのである。

その時、3日前にハーンの『西インド諸島の二年間』で読んだ奇妙な文章を思い出した。[……]それまで私はハーンに別に注意を払わなかった。どうせ異国的な風物の魅力を求めて旅した西洋人のダンディーの一人くらいに思っていたからである。だがとんでもない思い違いだった。ハーンが描くマルティニークの熱帯の夜を読んでみよう。

こうした熱帯では「夜」は上から暮れる感じはしない。山頂と山頂が連なるこの土地に「夜」が降りてくる、という気はしない。夜は下から、まるで息を吐き出すかのように、大地から立ち昇る。海岸線がまず暗くなる。——それから斜面と低い丘と谷間が影で包まれる、——それから急速に、闇が高地めざして昇りはじめる。しかしそれでもその高地の頂上は、島の残りが暗闇のとばりで包まれ星が出始めた後もなお数分の間、その尖端で火山のごとく輝き続ける。

2年足らずのマルティニーク生活の間にラフカディオ・ハーンは私たちの間で古くから伝わる黒人霊能師quimboiseurの秘密の世界の一つにはいり込むことに成功した。霊能師たちがよそに洩らすまいとして守り続けた秘密とは、ヨーロッパ人の植民地支配の下で死んだ何千何万というかぞえきれないカリブ人やアフリカ人の霊がひそかにわれわれクレオールの人々を守っていてくれる、という信仰である。この霊はキリスト教徒の霊のように空に住んではいない、そうではなくて昼間はフロマジエ(パンヤの樹)などの御神木の高い枝や梢に眠っている。しかし太陽の最後の光線が輝き始めると、こうした霊たちはたちまちのうちに人々や家や動物や野原を呑み込む暗闇の中にさまよい出る。ハーンはそうしたものの存在を直感した。

(3) ラフカディオ・ハーン「ニューオーリーonzの魔力」(小泉八雲・平川祐弘訳『クレオール物語』、講談社学術文庫、1991、pp.177-178)

赫々たる太陽のもとにまどろんでいるこのクレ奥ールの古都、その古風で趣きのある家々、日かげと木かげの多い町並、百年の昔を偲ばせるその町のたたずまい、気持のよい色の対照、あまたの国民のことばがこだまし合う街々、町全体がいかにも充ち足りて眠っているような感じ、古色蒼然として緑濃い趣き、由緒のある記念館や記念碑の数々、一風変った建築物、熱帯にふさわしい庭園と画趣に富んで人を驚かすさまざまな事物、恐らくはオレンジの花の香りで眠りに誘いそうな暖かい大気が、物真似つぐみの突拍子もない歌声でかすかにふるえている——これらすべての最初の印象がすっかり忘れ去られるなど、あり得ない。百年以上にわたって、ニューオーリーonzは放浪の魂を世界の果てからこの地に引き寄せて来た。この舗道を歩いた者の中には、インドや日本で生まれた人がいた。中国人や色黒のマニラ生まれの人もいた。西インドの島々や南アメリカ出身の人もいた。回教主の臣下もイオニア海の船乗りも、ここに家郷を求めて来たのだった。あらゆる文明国がさすらいの子らをここへ送った。北、東、西の諸国のあらゆる町が、神秘的で甘

美で誰をも捉える魔力を持った、この遠い南の町へ、安らぎを知らぬ魂を委ねたのだ。これら驚き訝るさすらいの子らに、この趣きのある、眠れる、美しい古都がささやく——「私のもとで憩うがよい。年はとった私だが、私以上に若く美しいものに出会ったことはよもやあるまい。[……]」

(4) 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房、2004、pp.54-5)

西洋脱出の願望にとりつかれた当時の西洋の人々にとっては、マルティニークと日本とは、タヒチやサモア同様、ひとしく非西洋として、ある種の共通項をわかちもっていた。そのことは上野の国立西洋美術館にあるゴーガンのマルティニークの絵を見ると一目でわかる[……]。ゴーガンにとってプレー山を描くことはジャポニスムと同一の芸術運動に属する行為だった。その証拠にプレー山の一連のスケッチは日本の扇子の形をした中に描かれている。実はゴーガンとハーンは、同じ時期に同じサン・ピエールの街で、数百メートル離れた場所に住んでいた。そしてハーンは来日以前だったが、プレー山を眺めてこんなことを呟いた。それはさながらプレー山をスケッチするゴーガンをふと見かけでもしたような、そんな感想である。ハーンとゴーガンとはその時、異体同心だった。なお文中の「クレオール^{クレオール}の芸術家」というのは黒人ではなく現地生まれの白人芸術家を指している。

時々、プレー山を眺めていると、『富嶽百景』を描いたあの偉大な日本の絵師と似た仕事を誰かクレ奥ールの芸術家がやってくれないか、などと私は思った。あの日本人絵師と同じくらいに生れ故郷の丘や山に愛着と誇りがあり、平野の熱気も蛇も怖れないような人。そんな人が居りさえすれば、『プレー百景』は確実に出来るのだが……

(5) ラフカディオ・ハーン「亡霊」(小泉八雲・平川祐弘訳『クレオール物語』、講談社学術文庫、1991、p. 198)

マルティニーク島にLe Pays des Revenantsという詩的な名前を最初につけた人は、このすばらしい島のことを「人々がまた戻って来る国」だと思ってつけたのである。そこでは自然の得も言われぬ魅力が、まるでギリシャ神話の妖婦^{エリクセ}キルケの愛撫のように、旅する人の心を魅了する。それだからこの島のことを「亡霊^{ホウレイ}がまた現世^{ゲンセイ}に戻って来る国」という意味でLe Pays des Revenantsと呼んだわけではなかった。だがその二つの解釈は、共に真実を含んでいる。このすばらしいマルティニークは、魑魅魍魎^{ちみもうりょう}が住む島でもある。ほとんどあらゆる農園にその農園固有の霊が住んでおり、お化けが住んでいる。そのある者は、最初誰かの空想でそのお化けが生まれたその土地以外では全然知られていないが、別のある者は、民謡や民話の種となって、住民たち全員の想像世界のものとなっている。どの岬や頂にも、海岸ぞいのどの村や谷間にも、その土地特有の民間伝承があり、口碑^{こうひ}がある。

資料2

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

(6) ラフカディオ・ハーン「東洋の第一日目」(ラフカディオ・ハーン・池田雅之訳『新編 日本の面影』、角川ソフィア文庫、2008、pp.33-34)

私は、神道の象徴である鳥居の前に立っている。これまで絵でしか見たことのなかった鳥居を、初めて見たのである。写真や版画でさえ一度も鳥居を目にしたことのない人に、どう説明すればいいだろう。門柱のようにそびえ立つ二本の丸い柱が、二本の横木を水平に支えている。下側の横木は上より小さく、円柱の天辺から少し下がったところに、両端がはまっている。上側の大きい方の横木は、円柱の上にのっかり、左右にかなり出っ張っている。これが、鳥居だ。素材に石か木か金属かの違いはあるが、鳥居の意匠はたいして変わりはない。

しかし、これだけでは鳥居の外観、その威厳、門としての神々しい形姿について、正確に伝えたことにはならない。壮大な鳥居を初めて見た人は、もしかしたら、空に向かってそびえ立つ、美しい漢字の巨大な模型を見た、と想像するかもしれない。鳥居の持つすべての線に、生き生きとした表意文字の品格があり、書の大家が四回筆を揮^{ふる}って書いたような、大胆な角度と曲線を感じさせるからである。

(7) 西田幾多郎のラフカディオ・ハーン論(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004、p.247)

ヘルン氏は万象の背後に心霊の活動を見るといふ様な一種深い神秘思想を抱いた文学者であった。かれは我々の単純なる感覚や感情の奥に過去幾千年来の生の脈博を感じたのみならず、肉体的表情の一々の上にも祖先以来幾世の霊の活動を見た。氏に従えば、我々人格は我々一代のものではなく、祖先以来幾代かの人格の複合体である、我々の肉の底には祖先以来の生命の流が波立って居る、我々の肉体は無限の過去から現世に連るはてしなき心霊の柱のこなたの一端に過ぎない、この肉体は無限なる心霊の群衆の物質的漂微である。

(西田幾多郎はこうした「万象の背後に心霊の活動を見る」考え方を「物活論」と呼ぶ[大平注])

(8) ラフカディオ・ハーン「焼津にて」(小泉八雲・上田和夫訳『小泉八雲集』、新潮文庫、2008、pp.388-390)

[静岡県しやうりやうの焼津で、精霊流しのとうろうの燈籠とともに夜の海を泳いだ翌晩の回想]

その晩、わたしはずっと横になったまま目をさまして、巨大な潮が、咆哮し砕ける音に耳を澄ませていた。はっきりした激しい衝撃の音、近くの波の押し寄せる音よりも、さらに太く低く、遠い寄せ波の低音が聞える——それは、建物も震えるばかりの、絶え間ない底知れぬつぶやきである——[……]昇りつつある太陽から、全世界にもわたる大軍の突進する音かとばかり、想像されるのであった。

やがてわたしは、子供のころ、海の声に耳を澄ませたときに抱いた、おぼろげな恐怖心を思い出していた。——そして、後年、世界のさまざまな国のさまざまな海岸で、打ち寄せる波がいつも子供のころの感情をよみがえらせたことを思い出した。たしかに、この感情はわたしより、数百万世紀も古いもので——父祖より伝えられた数知れぬ恐怖の総体であろう。が、やがて、海に対する

恐怖は、海の声によって目ざめさせられた、おびただし^{いふ}い畏怖の一つの要素をあらわすものにしかすぎないという確信に立ちいたった。なぜなら、駿河湾^{するがわん}岸のあの荒潮に耳を傾けていると、人に知られている恐怖のほとんどあらゆる音が聞き分けられたからである。

[……]

そして、わたしはひとりつぶやいた——海の声が、われわれを厳粛にするのは、なんと不思議なことであろうか、と。海のさまざまな発言に合わせて、魂の経験^{きけん}という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである。「淵々^{ふちふち}呼びこたえる」目に見える淵は、その潮の流れでわれわれの靈魂をつくった、より古い、目に見えぬ淵に叫びかけるのである。